

# 第 1 回全国副会長研修会記録

## ◆出席者◆

- |            |  |
|------------|--|
| ○会 長       | ・阿部 謙策                                   |
| ○本部副会長     | ・山中ともえ・川崎 勝久・堀江 朋子・鈴木 克俊                 |
| ○北海道ブロック   | ・高村 誠（札幌市立美しが丘緑小）<br>・三谷 和（札幌市立西岡北小・記録者） |
| ○東北ブロック    | ・角田 研（大和町市立吉岡小）                          |
| ○関東甲信越ブロック | ・片岡 学（茂原市立中の島小）                          |
| ○東海・北陸ブロック | ・山崎 治（吉田千尋 副会長代理）                        |
| ○近畿ブロック    | ・山田 孝（彦根市立鳥居本中）                          |
| ○中国ブロック    | ・濱本 琢也（岡山市立中山中）                          |
| ○四国ブロック    | ・杉本 一幸（高知市立三里小）                          |
| ○九州・沖縄ブロック | ・古藤 浩二（糸島市立二丈中）                          |
| ○事務局       | ・橘 厚子（事務局）・三井 知恵子（事務局）                   |
| ○会計部       | ・須田 淳一                                   |

## ◆指導助言者（ご来賓）◆

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 特別支援教育調査官 田中 裕一 様  
独立行政法人国立特別支援教育総合研究所情報支援部総括研究員 田中 良広 様

日時：平成 28 年 6 月 20 日（月）15 時 30 分～17 時 30 分

6 月 21 日（火） 10 時 30 分～12 時 30 分

◆司会・・・山中 ともえ

◆開会の言葉・・・鈴木 克俊

◆会長挨拶・・・阿部 謙策

・昨日からの雨で熊本の方はひどい災害を受けているようです。この雨が次第に近畿地方の方に向かっていますので、本日お集まりの理事の方々も大変かと思っております。なお、4月の熊本地震に対し全特協といたしましても、3. 1 1の時と同じように義援金を出させていただくよう会計の方に手配をいたしました。本日2日目の副会長会となりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

【近畿】・・・山田 孝（彦根市立鳥居本中学校）

○別紙参照 A 4 4ページ分について説明

※近畿地方は各県からの情報をそのままコピーをし、貼り付けしたものをまとめさせていただきました。なお、京都と奈良からは回答を得られていない。

追加説明（田中調査官）

神戸市は、以前、市の方針として、もともと自閉症だけの子は通級による指導で、との方針。しかし数年前から方向転換をし、知的障害を伴わない自閉症の子も自閉症・情緒障害の特別支援学級へ新しくつくって入れようとしはじめたので、今後さらに割合が増えていくものと予想される。

質問等は無し

【中国】・・・濱本 琢也（岡山市立中山中学校）

○別紙参照 A 4 4ページ分について説明

※中国ブロックは島根、鳥取、広島の3県に協力を得て回答していただいたものを集約してまとめたので、各県の様子については分かりづらいと思う。

質問等は無し

【四国】・・・杉本 一幸（高知市立三里小学校）

○別紙参照 A 4 2ページ分について説明

※課題1については情報が集まりづらい内容であった。四国は4県のうち、高知県と香川県のみである。

質問等は無し

【九州・沖縄】・・・古藤 浩二（糸島市立二丈中学校）

○別紙参照 A 4 4ページ分について説明

※ブロック最後の発表となるため、かなり重複する部分が多い。また各県の回答データについては回答数が少ない場合もあり、実際の数値でない場合も考えられる。

質問等は無し

## ◆課題についてのまとめ（8ブロックの発表を聞いて）

### ○課題1

- ・自閉症・情緒障害学級や知的障害学級については、就学先の決定の仕方が各自治体によってかなり違う実態があるため、正確な割合を比べることは難しい。ただ、自閉症の子がその中でもかなり多くなってきていること、また自閉症の子の中で知的な遅れが無い子が多くなってきている実態は確認された。一方、知的障害学級の中に自閉症の子がいるかは、各ブロックによってかなりの差がある実態が交流された。

### ○課題2

- ・自閉症児に対する特別の教育課程については、かなりの割合で有していることが交流された。また、特に環境において配慮している点については、例えばスケジュール、写真、イラスト等で分かりやすく示す他、見通しを持たせる**視覚支援**、掲示物やものの整理整頓、パーティションの利用等、刺激を少なくする**環境整備**を行っていることが分かった。**学習指導における配慮**については、スモールステップの指導、授業のパターン化が挙げられた。**学校生活への適応**については、教職員の肯定的な関わりや自己選択、自己決定できる場の設定の重要さが報告された。

## ◆全国調査について

- ・この2年間は教科書についての調査で、検定本の活用がほとんどで、☆本はなかなか使われていないという実態が分かった。
- ・今年度は「自立活動」についての調査となる。どのくらい時間をかけているか、内容、理解、取組の様子についても調べていきたい。
- ・自閉症・情緒障害学級と知的障害学級ではかなりの差が出てくることも予想される。
- ・調査方法については、昨年度と同様に全特協HPを通じて行うが、業者が変わったため画面上の見た目が違う。
- ・スケジュールについては7月下旬～9月上旬にかけて調査し、年内で調査結果をまとめ、第三回の理事会には報告できるよう進めていく。

## ◆指導助言

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所情報支援部総括研究員 田中 良広 様

- ・環境の整備は「色彩の配慮」「フラットデザイン」「机と椅子の高さ」の3つの配慮が大事である。色彩の配慮は色使いの問題である。現在、色覚異常や色覚障害の子は20人に1人の割合で存在し、通常の学級の中にも必ずいることになる。そのために、色刷りや板書への配慮が必要となってくる。フラットデザインへの配慮は、世界的にもなるべく単純な表示を目指す方向性になっている。例えばスマートフォンなども3次元から2次元へと配慮してきている。また、机と椅子の高さへの配慮だが、高過ぎはあまり見られないが、低過ぎは見られる。低過ぎることにより姿勢が悪くなり、その結果、集中力にも影響を与えることになる。
- ・自己選択、自己決定の話が出ていたが、どうしたら身につくのだろうか。キーワードとしては、自己効力感であろう。小さな成功体験を積み重ね、自己有用感（自己有能感）、自己選択する力、そして自己実現につなげていくことが大事だと考える。トークンの話が出ていたが、アメリカのビンゴゲームのように、児童生徒が模範的に行動した時にトークンを与えるという取組で、成果をあげている事例もあるので、是非取り組んでみても面白いと思う。

- ・校内での特別支援学級のプレゼンスをどう高めていくのか？を考えていただきたい。特別支援学級担当者の研修機会の確保は大事である。特総研でもIDとパスワードを取得すれば、簡単に配信やコンテンツを見ることが出来る。また、ICTをどんどん活用し、特別支援学級の実践を通常学級に広げたり、教科教育の充実を図っていったりすることが、特別支援学級のプレゼンスを高めていくことにつながっていくと考えている。
- ・インクルーシブの状況が進むと、支援の必要な子がどこにいるのかが分かりづらくなっていく。支援を届けたいが、その対象者がはっきりしないことになってしまうので、把握する手立てを今後是非考えてほしい。
- ・問題提起となるかもしれないが、失敗させないことの発表が気になった。特に学校教育という中では失敗は誰にでもあるし、失敗は大きな問題ではないということ、分かってもらい指導が大事ではないかと感じている。
- ・今後気に留めていただきたい言葉を紹介しておきたい。教育課程の問題としての「アコモデーション」と「モディフィケーション」であり、通常の教育と特別支援の教育の関係性を強くする問題としての「ギフテッド」と「タレンテッド」である。

#### ◆指導助言

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 特別支援教育調査官 田中 裕一 様

- ・色覚の話は大事である。色覚異常の割合は男の子で20人に1人、女の子は500人に1人である。基本的な対応としては、ホワイトボードでは黒と赤は区別しづらいため、「青と赤」もしくは「黒と赤」を基本とすること。また黒板においては、最近、チョークは改善され始めているが、白と黄色が見やすい。こうしたことは大事な配慮の一つと言える。
- ・致命的な失敗は別として、失敗をさせないことは、本当にそれでいいのか疑問がある。失敗の直後（その時間のうち、その日のうち）にいろいろな配慮や方法を使って、失敗が生きた経験となる仕掛けをつくり、気づかせていくことが大事である。
- ・教育課程の中にアンガーマネジメントやアサーショントレーニングのようなものをどう取り入れていくかを考えて欲しい。つまり、自立活動は案がアンガーマネジメントやアサーショントレーニングではない、ということである。あくまで手法、方法の話である。自立活動が自閉症・情緒障害学級、通級による指導での肝となってくる。配慮や方法も大切だが、それらだけで終わることなく、指導の積み上げが大事である。それをしていくことで、連続性のある多様な学びの場が生まれ、学びの質が保障される。通常の学級から特別支援学級や通級による指導への一方向だけではなく、双方向の関係が出来てくる。自閉症の子の保護者の中には自閉症・情緒障害学級への期待を大きく持って入級させる方がいる。この期待に応えるためにも、教育課程をうまく工夫し作り上げてほしい。すぐには出来ないと思うが、頑張ってみようとする姿勢を校長先生方自身から持っていただきたい。
- ・まとめとして、教育課程は本当に大事である。特別支援教育をより良いものにしてほしいと思ったら、配慮の積み重ねだけでは上手くいかない。そうした意味で、今回の調査はとても大事だと思うし、質問項目もとても大事だと感じた。是非今後も次に生かす良いアンケートを取っていただきたいと思う。この協会の果たす役割がますます重要になってくるので、この会を盛り上げてほしい。

#### ◆質問、感想

- ・自分の経験から言わせていただくと、白黒写真を撮った時に濃い目の色になる組み合わせが区別しにくい。また、青と黄色が分かりにくい人にとっては、薄めの灰色になる組み合わせが、とても分かりづらい。
- ・ユニバーサルデザイン（UD）の「誰にとっても分かりやすい」考え方と、特別支援教育の理想とする「一人一人の教育的ニーズに応じた教育」との考え方には、相反するものがあるのでは。
  - ※ UDの考え方はある意味、全ての人にとってのアクセシビリティであり、それでは間に合わないものがエクストラであり標準で載せるものではないと考えていただきたい。
- ・今回の課題1の調査結果の発表に現れていたように、各自治体によって子どもたちの就学先の決定のプロセスの考え方が全く違うということ、さらに、その考え方は各自治体に任されているということが分かった。（各自治体によっての考え方には違いはあるにせよ、知的の遅れがあるかないかではアプローチの仕方が全く変わってくるため、だからこそ教育課程の2本立てが大事になってくる）

#### ○山中副会長から2日間の副会長会のまとめ

- ・教育課程についてのいろいろ問題は、とても大切であることが浮き彫りになってきた。
- ・色覚の問題は通常の学級においては、まだまだ浸透していない。
- ・自立活動の内容をどうしていくか、今後の大きな課題となった。
- ・特総研からのガイドブックは我々の指針となるもので、是非活用をしていきたい。

#### ◆副会長会の報告確認

#### ◆本日の予定確認

#### ◆閉会・・・山田 孝（彦根市立鳥居本中）